拡大札幌部会（No.32）記録

日時：2023 年 5 月 20 日（土）14：00～17：00
場所：キャリアバンクセミナールーム＋zoom
参加者：30 名（会場 11 名＋zoom による参加者 19 名）
内容：

川瀬先生より、本日の拡大札幌部会では、中学校は三枝先生、高等学校は阿部先生の「政府の役割」に関する実践例を紹介すること、また、本日のテーマである「政府の役割の経済的な見方」に関しては篠原代表から、生徒にとって「政府の経済的役割が腑に落ちる」にはどうすれば良いか、完成形態でなくともよいから皆さんで検討して欲しいという依頼があったことが紹介された。

１　三枝利多先生（教師支援塾・元目黒区立東山中学教諭）の報告

中学校の実践経験から話す。できれば経済と政治の融合が理想。どうしたら中学校の生徒が「腑に落ちる(中学生徒ならば自分の言葉で説明できる)」授業計画を立てるか。

まず学習内容の本質を理解できているかが課題である。また生徒にとっては評価も重要である。

理想は政治、経済の学習融合だがかなり困難、関連づけるのがやっとだ。

全体で本質をどうつかませるか、パッケージ(全配当時間数（およそ３０時間）中で、 数時間ごとのパッケージを組み合わせて)でつかませるか、キーワードは順序性である。単元は数時間の「パッケージ」を組み合わせて授業計画を立てている。

「社会のしくみ」の必然性に気付かせるための導入が必要。例えば、なぜ議会があるのか？なぜ決まりがあるのか？など。

社会（世の中）のしくみは今後も、よりベターなものに変えていく必要があるし、変えていく主人公はあなたたちであると伝えている。

そのために、経済を先に、政治分野でも人権は先に、模擬選挙などは財政の授業後においている。また、「卒論は must」である。

何度かネットワークでも紹介してきたが、無人島漂着シミュレーションが有効である。

この教材は無人島の生活と現代の生活とを比べることができる。例えば、市場経済の良さ、分業と交換の必然性から、社会のしくみの進化に気付かせる、熱帯の無人島を前提にし、自給自足、分業の大切さに気付かせることができる。

ミッション＝考えさせるポイント、気づかせるポイントは社会のしくみの進化、とりわけ経済は生活するための手段であることに気づかせることである。

「元の島のマンゴーと辿り着いた先のバナナを交易する」その方が利益になると考える生徒は、より良く生きるために、より豊かに、より安全・平和に、社会のしくみがつくられていったと理解できる。このミッションによって生徒の気づきが得られる。

政府の必要性を島の発展過程をもとに気付かせるようにしたい。社会を豊かにしていくためには、物だけではなく、仕組みが必要なのだということにも気づかせるようにする。

しかし、学習内容が難しく多岐にわたるため、シミュレーション的な活動を中核に据えることの限界がある。特に政府の経済的役割をシミュレーションに入れ込むことは限界があり、難しい。

そこで単元の中核となる学習活動としてディベートを考えている、時間配当に余裕がない場合が多いので、パネルディスカッションを活用し「高齢者」「４０代の人」「厚生労働省」などの立場から考えさせている。

・ディベートを通して財政を考える実践の場合。

「山手通りに自転車専用道路をつくるべき」

「目黒二中の跡を中学生が野球をできるようにすべき」

「社会保障を充実させるために消費税を１０％にすべきである」

・パネルディスカッションの場合。

論題「社会保障を充実させるために消費税を１０％にすべきである。」

立場Ａ「高齢者」

立場Ｂ「４０代又は５０代」

立場Ｃ「２０代又は３０代（又は生徒)」

立場Ｄ「厚生労働省」

立場Ｅ「財務省」

立場Ｆ「内閣」 など

パネルディスカッションの立場は適切なのか？という疑問が出されることがあるが、発言の機会など主体的に学習する機会が多いという点で有効と考えている。

パネルディスカッションを通して、多面的・多角的な学習ができると考えている。この場合、多面的とは、経済や政治面であり、多角的とは立場であり、立場は先述の内容の立場である。

そのほか、地方自治の授業で防災をテーマにとりあげたが、これなど財政とも関わり生徒が政府の役割を実感するのに有効かと思っている。

生徒が本質にせまる、腑に落ちる実践を、それぞれの場所でそれぞれの生徒に合った内容でおこなってほしい。

２　阿部哲久先生（広島大学附属高等学校教諭）の報告

生徒の素朴理解として場面場面での政府の役割は覚えている。ただしつながりがない。政府は、市場よりも「公正」に仕事をすることができるとか、効率＝市場，公正＝政府という単純な二分法で理解している可能性もある。

市場は失敗するが，政府は市場の代わりをするのではなく市場理論に近づけるようにルールづくりなどの規制や介入を行っている。

市場がうまく働かないとき，政府は市場のかわりに配分の仕事をすることもあるが，うまくいかないこともある。

政府の力＜市場の力であることは多い。市場＝個々人の判断の集合体だからである。そのため「不景気だからお金を使いなさい法」を作っても人々はお金を使わない。

法律で社会のゴールを示して市場を創出することもある。

このような政府の理解を確認するための、指導プランは以下の通りである。

１　核となる概念の確かな獲得のための活動

＝チロル分配ゲーム（1 時間）

→市場が万能でないこともが政府が万能でないことも理解できる

２　各単元での活用

＝「大きな政府」と「小さな政府」を例示した単元（1 時間）で政府の役割を整理させ、その後各単元でも再確認を繰り返す。

概念をめがねにして実践している。チロルは鉄板ネタ。経験的には中３～高３、教育実習生まで、納得した（「腑に落ちた」）反応を見せる。特に教育実習生では事前事後で指導案が大きく変化する。経済に興味がある実習生が希少だが、ただしこのネタで実践すれば納得感が獲得できる。

３　チロル分配ゲームからの知見は

経済理解のハードル　→　先生(政府)がどれだけ配分するか、困難だったら…。

個々人が自分の欲しさを意思表示し合ったほうがうまくいきそう。

誰でも共通に使える物差しが必要。それが価格。

独占に対して、政府は独占禁止法などを作って防ごうとしていた。政府は市場経済に介入(←規制)して「市場の失敗」を修正することができる。

ただし、独占禁止法は市場の代わりに政府が配分しようとしているわけではない。本来の市場に期待された働きを邪魔するものを取り除いただけである。

4　大きな政府・小さな政府論の問題点

今も学習指導要領では「大きな政府か小さな政府か」と問わせようとしている。この姿勢は妥当なのか？

エスピン・アンデルセンの福祉国家レジーム論では、欧米の国を社会民主主義、保守主義、自由主義に分類している。

社会保障の研究者である武川正吾は著書『連帯と承認』(2007）の中で、日本は負担も給付も少なく自由主義レジームの国に近い（中負担中福祉ではない）のに、福祉を給付のみで捉えており、政府は自由主義レジームの国の政府がしている仕事をしていない、日本は社会的レッセフェールと呼ぶべき状況と批判している。

ここから見ても、大きな政府・小さな政府の問題の立て方には問題がある。

5　それを超える視点、具体例は

障害者のニーズにはとても追いつかない状況であるが、政府の役割として何が必要か問

うてゆく事例が見つかった。

アメリカの事例。アメリカではアマゾンキンドルを巡って裁判が起こった。

大学が電子教科書として Kindle を使用することと決めたことを視覚障害者団体が訴えた。裁判はどうなっただろう。 →大学が違法性を認め和解した。

アメリカでは障害者への差別的取り扱いが法律で禁止されていた。当時既に発売されていた iPad には読み上げ機能があった。その後、Kindle にも読み上げ機能が搭載された。

アメリカでは法律によって「権利」（＝社会保障のゴール）が示される。これによりゴールに向かう市場が創出される。その道筋は政府が決める（行う）より、市場でニーズに合った商品を提供させた方が、無駄がない。

独占禁止法のような市場そのもののルールを作るのも政府の仕事だが、市場競争の元になるゴールを決めるのも政府の仕事、これらを広く「規制」と呼んでいる。

6　アメリカモデルと日本モデル

もちろん，それぞれに問題点はある。アメリカのようなモデルでは，例え義務づけられても負担に耐えられない主体がでてきて（それがより効率的な商品やサービスの提供を後押しする面もあるにしても）取りこぼされる人が出る可能性がある。

一方日本のモデルでは，政府の財源の制約やゴールの解釈の幅によって得られるサービスが不十分になる可能性がある。

市場経済を理想状態に近づけるために、立法などを通じた「規制」によってルールに沿った競争を行わせたり、人々の行動のクセを利用して「介入（関与）」したり，競争のゴールとなる社会の状態を指し示したりする。

7　ここから政府の経済的役割をもう一度整理する

規制：福祉サービス、独占禁止、公害対策、教育

介入（関与（外側から安定化させるように関わる））：財政・金融政策

市場による配分がうまくいっていないときにその一部を代替することもある。ただし、非効率を伴う。

配分：社会保障給付、公的福祉の提供、公教育，課税（どちらとも関わる）

様々な単元で政府が登場するたびに、３つの視点から分類・分析させる。

「この場面での政府の働きはどれだろう？」という問いかけである。

アメリカの資料にある政府に関わる様々な「概念」をこれらの３つの視点から分類・分析させる。網羅するだけではなくその働きは何か気づけるようにさせている。

３　山崎辰也先生（北海道津別高等学校教頭）のコメント

社会科は主権者を育成するためにあり、効率的な意思決定ができる生徒を育てる。問題は「何を」の学習内容。政府がやっていてもスポットを当てられていない。

提示した表は『公民（政治）の経済的理解』の全体計画から作成した。ミクロ経済学とは明らかに異なる。特に７章「税は人々の行動をどのように変えるのか？」、11 章「税制をど

のようにしたら良いか？」である。札幌部会前に篠原先生から、「政府の役割を経済的観点」から学習内容の単元構成を示せとの依頼を受けた。

７章、11 章は税率のあり方を学ぶことが内容となっている。しかし、本表は踏み込みが甘いが体系的にはよくできていると、私は考えている。

日本では「政経」では学問中心に、「公共」では公共経済学の知見から学習内容の構成が可能だ。特に問いから。例えば、「なぜ税金が必要なのか」など、アメリカのアプローチの知見が活用可能であると考えている。

４　佐藤英司先生（福島大学経済経営学類准教授）のコメント

経済学の視座よりコメントする。

政府は社会的ルール（法律・条例・決まりごと）の設計・強制する。例えば、社会における個人の経済活動は、公正かつ自由な活動ができるように。社会全体の無駄が少なくなるように行動するだろう。生産者・消費者に優劣がないように政府は行動する。

何が「社会に必要なもの」かについての合意は容易でない。「社会」の捉え方も国なのか地域なのか地球規模なのか。

本当にそれが必要なのかどうか。

無人島シミュレーションは生産・交換・分業の重要性を提供する。また公共財の供給・行政・法制度・金融などの必要性にも気がつく。

チロル分配ゲームは効率と公平のトレードオフに気づく。「政府」でなければいけないのか（安易に「政府」に頼りすぎにならないか）。生徒自身で「社会で必要なもの」を見つけることができるのか。例えば、以下２点である。

まず社会をどのように捉えるのか。次に生徒自身から「遠い」（身近ではない）個人に対してどのように影響を与えるとよいのか。

政府はあくまで個人（生徒）の集まりである。政府は国家に 1 つだけか？地方自治体・国際連合・中央銀行は？・・・。市場に任せるか政府が分配するかを「政府」が決めている。

５　兼間昌智先生（札幌大学非常勤講師）のコメント

中学生にとって、政府は遠い。政府がなぜ必要なのか。

無人島シミュレーションの教材では、Ｘ年後の政府やこういうときに政府が役立つか、本質をつかませるが、政府の規模を解説する必要あり。この政府の規模はふりかえりで教える必要がある。生徒は政府が「何を決めているか」と気づく。そして政府を選んでいるのは私たちである。

６　杉田孝之（千葉県立津田沼高等学校教諭）のコメント

私は主題学習の授業設計をする際、教材選択の５条件を活用している。この教材選択の５条件とは、本質性、具体性、関心適合性、関連性、発展性である。

教材選択の５条件で、今回のテーマに即して考えると、本質性、関連性、発展性の観点から政府の役割を経済の観点から設計すると良いと考える。

12 月末に開催された冬の経済教室でもこの教材選択の５条件をベースにして社会福祉の授業設計案を提案した。

三枝先生は、「政府の役割を経済の観点」から生徒にどう腑に落ちさせる学習内容にするか、生徒が自らの言葉を使って説明できるかどうかが提案された。

高等学校で教える私でも、高校生が自分の言葉で「政府の役割を経済的観点」で説明できるかどうかは大変怪しい。この理由として、経済の観点から政府の有り様のフォーカスの仕方、いわば学習内容や目標が不明瞭だったと考えられる。

経済の観点から政府の役割をどこにフォーカスするか、中央政府か、地方政府か、中央銀行か、国連か、どの政府にフォーカスした学習内容が必要か？が問われる。

中央政府と地方政府の違いは中学校では理解できていない。特に地方政府は抽象性が高い学習内容となる。地方でも中央でも学習内容をどこにフォーカスするかが問題となる。

私は阿部先生の規制・介入・配分の分類から、「政府の役割を経済的観点」から考える学習内容が考えられると思う。

篠原先生からも社会保障は経済学習のなかでも少し異なる分野と指摘を受けているが、社会福祉の問題をどうするか、「公共」という新科目で内容をどうするかが問われている。札幌部会前の準備会でも、政府の役割で、介入なのか関与なのか議論しにくいとの指摘があったが、私は配分・分配の問題から、「政府の役割を経済的観点」から授業設計できるのではないかと考えている。

７　川瀬雅之先生（札幌市立札幌新川高等学校）のまとめと補足

これまでは、たしかに政府の役割がフォーカスされていない、つまみ食いのように政府を扱ってきた。政府の捉え方が甘いのではないか。やっかいだが、さら政府を経済的観点からに踏み込む必要がある。

特に中学校と高校で整理が必要。どこの単元や領域を組み合わせて整理すればよいか。生徒の発達課題に応じて実践する必要あり。

山﨑先生のアメリカの学習内容の一例だが、扱いが難しい。今後政府なり、理論→事例→スキルの習得→社会で役立つように実践したい。

特に身近なネタで、空間的に捉える。具体物や場面設定は生徒に構想させる。授業者が以下のように問いを発する。なぜ？しくみからどうして、どう選択するか？どう融合するか？判断させる。最終的には自分が社会をつくるとすればどうするのか？分析、評価、政策の立案が必要である。

８　質疑および討論

・新井先生からの質問とそれぞれの回答、補足

阿部先生に、先述の政府の役割の三点のなかの介入ということばに引っかかるが、どう捉えるか。
佐藤先生に、個人の集まりが政府と発言されたが。社会契約的な政府のイメージなのか。そこまで考える必要があるのか。
兼間先生に、シミュレーションしてからその後の実践にどうつなげるのか。二つの間にジャンプがあるのでは。
→佐藤先生：そこまで考えているわけではない。
→阿部先生：権力分立を削除した。政治では三権全部扱う。三権全部合わせた政府。厳密に言うと国家。
→兼間先生：中央政府、地方政府、限界、考え方として分かりやすい。ふりかえりが必須。教える教え方、生徒の言葉を用いてもできるし、さまざまな方法がある。生徒が腑に落ちることが必要
→三枝先生：シミュレーションはきっかけ。活動の中核は実践後生徒の発言で内容理解を掴む。掴んで評価した。金子先生も日々の実践で内容をつなげる手立てがあると話す。またシミュレーションはやりっ放しではない。
→阿部先生：今の議論を聞き、コロナ関連の政治学のシンポで竹中治堅氏の基本的に医療行政は県単位、国家は関われない。地方分権について突っ込んで実践する必要あり。あいまいにやっていた。

・川瀬先生　松澤剛先生（札幌開成中等教育学校)に発言を求める。
松澤先生：中等学校のカリキュラムの説明。細かいことにこだわらず実践。経済は経世済民。政治と密接に関連あり。コロナ関連政策を各政党の有り様から、投票させた。国際バカレロアで原油高対策の政策を述べさせた。テーマを出し生徒が掴めばよい

・三枝先生：高校で「公共」が入ったのは良かった。中学と高校の学習はつながったのでは。市民性が育つ。経済と政治が融合できるのでは。
模擬投票はやらないと先ほど発言したが、中学では、現実の政策を使うとクレーム、調査が来る。そこで架空の政策で実践せざるを得ない。他ではどうなのか？
・河原先生：みなさんネタ型で実践していることに感心した。阿部先生の落とし方が絶妙。チロルで発問が良い。
次のステップに生徒を導いている。ボランティア、子ども食堂、民間から大きな政府と小さな政府が出来るのでは。
ご近所での助け合い、日本と北欧、政府の役割がほとんどないところで、政府の役割の学習も可能ではないか。
・川瀬先生：三枝先生の質問への回答になるが、政府は自分たちがつくる。自ら考えてより良い社会を考えさせたい。だからこそ、段階を追わせる必要あり。主権者教育は文科省と総

務省作成の副教材があるのでそれを活用すれば問題ない。私は選挙公報を２人で一枚、課題、争点を捉えさせている。過去にはクレームもあったが。5/3 の朝日、読売、日経、道新を読み取らせている。

９　篠原代表のまとめ

先生方は、政府の役割をほとんど意識せず教えているのではないか。経済の単元だけでなく、ほとんどの単元で政府の役割が出ている。しかし教えるときに、政府の役割の本質を押えていないのではないか。

今、経済教育の本質を見直している。その一貫として、今回の部会を設定してもらった。

今回の部会の報告、議論は参考になった。政府の本質に迫ってきているのではないか。なぜ政府なのか。ほぼ共通したのは、どういう役割が政府にあるのか？である。このトピックをまとめるだけではもったいない。まとめ方の手腕がもとめられる。

どこで、何を本質として教えるのか、それを考えてゆくのが我々の宿題である。もう少し深めて幅広く論点整理をしてゆく必要があろう。

今日は、政府を取り上げた。次は市場である。先に政府を取り上げたのは身近だからである。市場と政府がどう関わっているのか。夏の経済教室では中川先生にご登壇頂く予定である。

（文責　杉田孝之）